組合だより　第37号　2013.10

紀の水

和歌山市管工事業協同組合

成福院周辺の紅葉／高野山

URL http://www.w-kankoji.com
E-mail:wakayama@w-kankoji.com

高野山「成福院」

1200年におよぶ歴史をもつ高野山、弘法大師(空海)が開山した真言密教(しんごんみっきょう)の聖地。標高900mの山上に、金剛峯寺を含め117カ寺が集い、一大宗教都市を発展させてきた。

成福院(じょうふくいん)は山内ほぼ中央の蓮華谷という所に位置し全国でもめずらしい八角形のお堂「摩尼宝塔」があります。ビルマ方面戦没者のご供養に力を注ぐとともに当院と深く関わりあるミャンマー(旧ビルマ)との親善交流に努めております。

－ 目 次 －

特集：
紀伊半島の大水害復旧応援から２年 …… 1
役員会報告 …… 7
組合の動き …… 8
青年部の動き …… 9
雑学の泉 …… 10
会社訪問 …… 11
趣味のコーナー …… 12
編 集 後 記 …… 13

特集　紀伊半島の大水害復旧応援から2年

『止まない雨』那智勝浦町

平成23年９月２．３．４日台風12号は自転車並みの速度で中国・四国地方を縦断したが中心の東側に当たった紀伊半島は観測史上最大の降水量を記録した。まさに天の底が抜けたありさまとなった。その惨状は土砂災害・河川の氾濫となって表れる。

紀伊半島大水害から丸２年、平成25年９月４日　那智勝浦町では、那智川流域の井関地区にある「紀伊半島大水害記念公園」において慰霊祭が営まれた。時折激しく降る雨の中、亡くなった28人と行方不明１人の鎮魂をする。

今回、『紀の水』第37号編集委員会が９月17日に予定されていたが15日の台風18号が京都府・滋賀県に大水害を与え、テレビでは桂川の氾濫・福知山市の浸水が放映され、和歌山県内でも串本町に竜巻被害があるなど自然災害への対応を再認識させられた事もあり、那智勝浦町水道応急復旧応援から２年後の現地の復旧状況･当組合の仮設工事の状況・那智勝浦町水道課をあらためて取材することになった。現地取材には、災害担当理事・本誌担当委員の２名が復旧応援に携わった期間（９/22日～29日）に合わせ出向く事となった。

24日㈫８時30分に和歌山インターを出発、途中少休憩ですますが、那智勝浦到着は昼を過ぎるだろう、田辺で高速を降りてからの道路状況は10tダンプ・重機回送用トレーナー・大型レッカー車など建設関係の車両が多く、道々での工事（国道42号線からの進入路等）でガードマン

が目立つ。災害復旧工事や高速道路関係の工事も増えているのだろう、紀南地方にとっては高速道路の開通はライフライン（命の道）そのものである、世界中で「TUNAMI」と言う日本語が通じるようになり、和歌山県では８万人が津波で亡くなると言う予想報道がされる中、「俗名42号線」を走る気持ちは複雑である。話のみ寄り道するが、「高速道路をこしらえるんやったら、ついでに水道管も埋めるなり、吊るすなりして和歌山市から勝浦・新宮までつないどいたらええんや！」という話を耳にした。

２年前、当組合災害担当理事４名が、那智勝浦町水道課からの正式要請があり現地視察に赴いたのが災害から約半月後の17日、「災害時応援協定」は和歌山市水道局（平成12年締結）のみであり、現在の情報社会においてほとんどゼロに近い現地情報をたよりに那智勝浦に向かうこととなる。現地に到着後、知ることになるが那智勝浦町水道課職員数は10人余りであり、本人･家族が被災した方もあり、他課から職員増員を受けるが、応急可能な浄水場の再開・給水活動・被害の把握など考慮すれば要請に時間を必要とするのは災害時の常である。確かに交通の便では東京より遠くなった勝浦・新宮とはいえ、県内であり車で４時間ほどの距離である、何故「応援要請」に時間を要したのだろうか。

「那智勝浦町水道配水幹線応急復旧」は22日現地到着後より作業開始、24時間体制を敷き夜間工事の末28日早朝５時に完了、送水を開始、破損による水道管内の泥を洗浄し、徐々に各家庭の蛇口から水がでる。災害担当理事たちが視察時に現地水道課長から強く要請された９月中の水道復旧であり、後に結ばれた自衛隊との28日迄の給水開始期限であった。（翌日29日朝　那智勝浦町立体育館において給水活動に従事していた自衛隊災害派遣撤退の為の解団式が町との間に既に決定されていた）。当時、期日までに工事を完了せざるを得なかった災害担当理事たちもヤレヤレであったろうし、現地に赴いた作業員・後方支援に携わった組合員・管工事組合職員たち、また長期にわたり災害復旧対策に尽力されてきた関係者、様々である。

話をもどします、今後津波対策のために紀伊半島をとおる高速道路が早急に必要になります、那智勝浦もさらに短時間でいけるでしょう、さりながら約600世帯の断水に１ヶ月を要したライフライン（命の水）の復旧は将来、常につながっており、早期水道復旧が成し得るだろうか？

紀伊半島大水害から約一年後の８月１日、那智勝浦町での応急復旧の実績を踏まえ、和歌山県と和歌山県管工事業協同組合連合会との間で「災害時応援協定－災害時における水道施設復旧作業の応急対策への協力に関する協定書」が締結されました。市・町単位から県単位へ　行政側での対策が一歩進みました。我々管工事組合としての今後の災害対策への「一歩」を探して、２年目の那智勝浦町の「復旧状況調査」と「復旧秘話」を求め再び現地を訪ねます。・・・・

12時30分現地到着・・・

現地の状況

①那智谷大水害　　犠牲者の霊標

（28人が犠牲になり、1人が行方不明）

②土石流の跡・砂防ダムの建設

（砂防ダムの有無が生死を分けた）

③今も残る傷跡

④那智川護岸の復旧工事

土砂が膨大なため、処分場として町所有の
山林埋立てが計画された（町水道課取材）

⑤那智の滝の復旧

（見上げるクレーンと3本の滝）

復元日本一の滝へ

（鉄骨製の仮歩道、比較ユンボ6t）